閑田次筆

四

1 曽5
22
4止

曽 5 イ
門 22
號
巻 4

閑田次筆巻之四

雑話

○予が識る人野遊する時ちよ虫その耳
中へ入りけるが何とはなくその耳に響をなしければ
其香をこのむと必よるものなれどもにはかなる
ことゆへ何ともなすべきやうもせんかたなかる
べかりしを其友なる人卒に思ひつきて眼も口
も鼻も皆くゝとぢめさせ入たる方の耳より
息をはげしく吹入れば吹るゝかたへの耳より
かの虫出去りしとその友子がもの語りし仕

まりん用ふべきことなり
○小児気にはきたる汁を飲ての乳よりいりかかも
せんうとなれば数珠の珠（タマ）をとられいとふ小児すにつる
めさき丈を力にてしく汁を引出やさきやりたも此時の
そこらにみて死するもあるふ痛苦を救（スク）へるに
○小児戯れに錢を呑みて咽に滞りて死しける
があり其にはそのまましきもの烏芋（クログハイ）を多く喰へば
若（モシ）自（ミヅカラ）喰へてことならざれば錢ともに下され錢は錢なども
嚙（クダキ）きその口へ入る
もゆるして降下すれば滞らず此これは本州にもある
ことなれども大かた医なきくにはわざれは急に持る
ところに用ゆに記す
○嬰兒（エイジ／ミドリコ）のはらまりふ泣入しことを腹痛なりとて医を

まへ頼みて薬を用ゆしかども更に験なくして
ついに死りそのちに死骸を見れば背に蜈蚣（ムカデ）
喰付てありし背をたたきしかば更に泣しれ此
毒なりしと其ちの合にたれしこれを毒を干する
時はきしと云はじ此薬せるりしとし其に非命の
ても毒の形かいろぞうり浴くんきくも出しく胸
つよりしるましきん人其かせてかるそくひ錢は
毒の頭に汁などあやまちて飲りそこんやうのこと
よくしん此つくべきものぞかし
○ある書に飛驒高山人紀より乃書に同國
高原山中には谷水を食用にするか常なるを
ある人暑さしたまふ時一掬（スクヒ）呑を

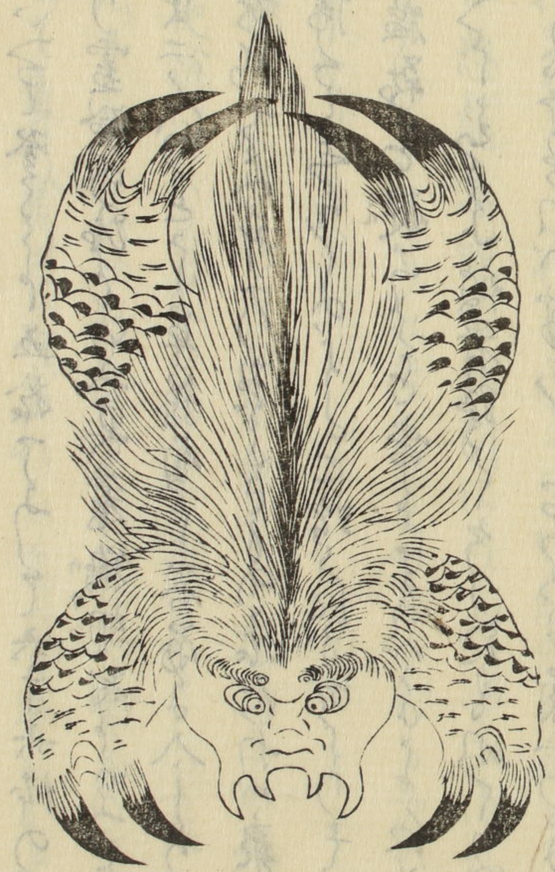
さらに其水を清起れば腹中雷鳴しいたよ
り療ずれども驗なきものゆえに大蛇のかた
ちにより其毒に當てたるんとあるべき考へ
古釜の類れ鐵を濃く煎じ煎じ煎じ煎じ
平愈せりまた他の脫皮炭薪ふまれば猶釜破れ
ものし其内草莖と大に入て燒べ臭きものゆえ
なわりこもるこの紀又ゆ隣の菓子屋のもの
せる釜内れを三日の後より此方を用ひまて釜
内に燒くるゆ水いまこれたりれども跡いそこと
あくまり後十余年のちまた同家にて茶釜お
のづから破れとこのみるびいまに其のことたれ
ば頭くまりたる水急やかに其破るるもこづく

とこまれぬ愈りといひつたへたり
○草莖にて蜂の巣にて指さすは急てあり
はうば村中の小兒数まふわぶるる足なり蜂ふ
刺せてやぶて草の莖にて指さすは急てあり
ゆえ後にて敵と弟の又はつぶに急と刺ること
ちれたるは毒中にて蜂刺まるる人の
しの物茶菓物をたくいはあり酒と煎し
て其癖ようければ即ち熱氣ありて手止まり
ちれも毒のゆえ刺れ人の即時の働なり
○反鼻の刺まる毒汁氣血ともふ上逆して害
をなしたれば死ぬもの刺まる毒汁をもて
手ぬぐいを極りなは綿に汁のことと即時に拔きば

後難なりといふ又ある家に秘する法干鰯を濃
煎じて刺さるる腫痛をはくべし毒氣も付
もとろけて速に治とぞ狂犬毒はせをうしと
死よりはげやすく治方も多けれども見い医のく
わるるふるるわざ贅せざる所にて愈
たべうべし愈ば切刀にて血を出すべし毒ともなる
ものし熱氣にもちて病愈やすきものなれば猛
○江戸にて武小屋の霜直の番葛葉を負さる
僕に雷火落ちて特と葛葉の間より下へ抜
しより僕い氣絶しさ舉るやく進れると同像の
如き是たちまちとして走ることを能まり
見をそなへにて彼篤れる背をひさもの拾さ

まば黑氣ひろがりさげれて氣をやり返しさりとて
こるもの出きさとして其度新りものに活し活りとぞ
○はるふるれたりもうし表根乃士又子居間と
異りてあるうべし雷鳴高ふ近く其子のあるる室
へ響く音とものこと又やがて走ることいふべ
こふ行ふて烟氣の中もりこと言ふりてこれい半身
焦れたるべし氣いさうしうべしうべ療治さ平
復さりとなりぬべ此豪氣乃くもあわざるもの
なり元震死せるくん其身の篤る時婦てさふれ
びく肝を伸せるべ多し歩は陰る氣は陰りなく
て手清のくん乃震死せるもまゝ中の色さい管の筋ふ
觸るものやいはちもひるべし臍ゑく

もれい不敏（スクハス）といつり作て雷の臍を掴（ツカ）ん
とする所をとる
○肥前玄界東國行脚乃紀をたづね見るに
くるのまた雷獣（ライジウ）をとりこるとあるのみにて
國とゝろされるは狸（タヌキ）ふ類ゝとうけ合ふ
ものゝ
るくのそなる所なのごとし虚實いとゝ
いとゝもつたうをること甚くのいとゝ
こゝふ為とす



享和元年五月十日沈藝州九日市里
塩竈へ為入死雷獣の為大サ曲尺一尺四五寸

○但馬豊岡の人鷄籠橋を渡りて向ふの岡に根張り出でて四箇の
ふくろいと称して五拾丁ばかりて六十六体の地蔵
ありて霊験の仏にいます其藁縄村とかの
如く童二人つゝ草履角に入れの橋の
下に長さ七尺斗り赤ぐろきものあたれい竜と潜
て出ることつゞくを祈るにかりそめ色の
ものい猫鼠と捉ることを常とすれば家に養ふ
と捧へて守ふ彼者踏て出もめくる愚れ
ることもなくれば家ごとに角一つを出
て身は木の色に金の光を帯びうたり五
の青龍のごとくうつしくれば橋ごとに角と

捧ることあり風雨なりてとゝろんみなぎさわ奥
の海より河を隔て元八間半の白よりは金色なる
が脱抜ることしかもちきの神龍の所為成べし
つゝよ悪龍毒地の類ひにあらぬ治ふ伝代の霊な
ぐ事ちよりれ社の実のりたるも三月合され
ることゝいふ
○南都の人の話る松茸を拵ふる桃灯を拵
へて夜行けば其光とゝもて飛ぶことつはもうの
ちらしたるわがたるもと賞ものい行と二
本うちて豆の殻を拵ふれば生ぐも踏きて飛ぶる
な捉人又慈悲者いまの殻を拵こして吾庭よ植西
為ことのうち出た殻の中ゝ卵を行きはちゝの卵未

るとりの杜よりもりていりて聲とをかの君庭うてせ
しうたることとりて毫にこめて雪れば雪安〳〵春日野
みて世も捉り薄も根こそびたくこれりとなんをみは
きてかりくばせ中のこと笑ひたくてもやくなりて
服部よ利ふくこ服乃不至にたること歎うて沢時人
停よ羅こる稿こき雑利よなりて寡婦乃糊に延
〳〵なれるごこし又扇と衛うれ鎌要といふこ紙
仕ちくこれに儀りて利を得るものもつぐの雪乃
めけこるものてこのくたりて色こともあこのい
角りて要と造る者もくなりこと扇屋も
きて扇の損ごるこてくなりしい大ある損なり
と武者うりさみ世雲者もめくりこて立れて

労ケさうりふいんも亦得やてきことちとりて
慣減ちべし

○凡題智いオに出づオは事ふ物ひあるのこなり
ごやもまれば其身を立て揚げずまとて曹操
なはこはひよりたづために殺されるごとしこの
坪坂直ぬオ智雑といふものと手れ　そもこの寓を
「風月の君いまセ」世教ふ多人ぐるは凡いオと智と
ひとつものてなりにれごも俗とふい其ふるめある
ごしにこと指揮しく祝こきたられこしるものい
智ありオあるんはまるよ智ある人いまれるも
きれこことにしいれりきこのこにれもふこ
千里秋月易も難うて指揮せごれど強る風よ海

うたる軍船も梶の制をそなわで瀾ふ動くよりに
仕ふる者と用ひられでうくる者を撥ても赤くの
ちくこころ弥ふるにオの行よきふんをくも
ふれそなびたりしたちくんの身をたつるなる
きの多うるこころは学びのそちくなるぶをぐる
士農工商乃世ふるくるりよ世ん投をこれわだ
ひられひもきらるる海でしおのうぶとれたるもの
ちかくもオなるわて者をおるぐくもひくもで也
こきき市教をすきくも伝く国えんとてっつけ行ら
ひくしゆきるりゆ記のる

○右オ者辨おりふくるく息資規ある学道の僧
にらるくみ其人云仏修よりくいるで者いるく

のくぶくく国度一猫亜人のごくく恵い賢人な
ひをべーオは氣人氏オりて者とおりのい法ふ
のは乃を開ひるるるそもとも紙ふそ働きん安
きをとるる人皆迷ひるくオをたちに者とを
者るもをるるものわも沢オ右れどく恵れ
ゆ善ふくオ乃ぶ所よるくぶとぶ
○又ふ学道の行よる石国をぬむと恵き僧
い女犯肉食ふも遠る罪深ー女犯肉食は罪を
其身に上ふ石国の罪は他にるふもくひる相者人
に行りく紙男天死相ふり其日死をべーとこく
て紙ふ其朝に及びく常ふ変ふとなそれば彼法
を開ふるの相乃真をふと弟ふ一夜ふふ死

しりたるみ物つくるに相乃結ぶべきにたること
みぐるきしの徒らび出わざこが説の達ることを
に苦るとを殺害しるこたり吾命ともうくしかも
ちつぐるとを物てもも真術の名聞とをくること説法
つる佛乃教誡なりしるも
○ある説はまきて官所くし出し律僧低頭せば官長
これと咎めるれに律の戒法僧を弱て頭を低
と言わればそりはるわるく退うめ彼もの僧を石
て其方と弱るれみ或役寺の僧とれい一應いたる
たるなるも隨方毗尼ということをりく毗尼を便の
なるても用ひ此はのにあり事の写きに僧ぐ
即神ゆり見をもく誌るもしば次日真僧

をなれしみ為れたるく頭を低たるのを隨方便は
いうをとつれるを魔ける乃ち檀首やりたく
説のるい次にしく先不敬をるく出をと為りし
なりるみ華頂ものてもも未寺乃僧僧与寺のるふは
きて市を押べきるのあるうば役僧をうくと指揮
せわるも不憚律るの市と押出けるとこりうば
役僧もなるるを市を除くべるみびられも
あしる老僧にいるふせんと同しに為るく市と押
せるいるに用るく律僧乃僕奴と具一狭箱をも
るべるるはあるで用ぬるいるとく教られるば
出らいるみを説りと侵とやるく市とるのて押
るりるで用ふ入ていを真禁をるるるる同じ佛教

も人道のかたがたの中一隅（グウ）とのゝ寺ら撥板漢（ハンカン）い名つゞし

○東福寺開山の弟子に癡兀（チゴツ）坊といふは道人な

てゆゑ〻〻ゞ教律僧は本法を学ぶ〻〻佛制をわ

法師死法師死用ゐるものをいふ癡兀（チゴツ）坊弟子

何で法義のことをいふ〻わりくべ宮ものゝ事を

いひたりて物ゝ〻〻世坊い寺法をきくとも

○めて人尼といふは美想国師の弟子ゝ世ふ作る

ものゝめざ〻〻猫の庭ぬけ〻水ゝるねびあるやゝ〻ゞ

ゝ〻〻〻〻此物ゝ〻ゝ代結ゞ〻も作ゝ見

いめ大尼の作ゝ見いのゝ〻〻作ふ実いゝゞ〻〻ゞ〻〻美

想乃弟記ゝ〻〻ゝ〻〻〻〻ふ徒〻〻〻れぬ〻〻て穏なり

○元亨釋書に著者虎関禅師い真又徽宦（ビクワン）なりしゝふ僧

の官家乃童子達ゝ農（ムル）於ゞのはいゝ〻〻〻の徽宦なること

舞ゝ〻〻〻名真系譜とゝ〻て世藩とゝ〻ゞ〻〻〻〻〻

大中ゆゝの恩なり〻ゞ虎関〻〻〻〻大聖釋迦佛乃

法孫師錬とゝ〻〻〻ふ〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻止〻〻〻〻

○聖徳太子伝記に飢人ふ〻〻〻〻〻〻達磨大師と

説に付〻〻真日十二月朝日〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

と虎関禅〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

彼乃開山の飢人い或説〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

○近来黄檗竺庵和尚遊山のはじめ猟師が鉄炮を放をさるを
みて侍者の僧にあれはなにぞととはれしに一人の侍者虚(カラ)なり
といへるを和尚聞て日本にもこのふしぎなる空虚を唐土と同くいふ
ことの語を混(コン)ぜられしが此和尚はよく和語に通ぜられしかども
されば異邦の人はいかに違へることありても我ひとを
叱(シツ)せらるゝ所なれど和漢の語混じて聞わけちがふことも
ありしなるべし唐音をもて解するもこれらのたぐひは
得がたかるべきことなれ

○同じき竺庵和尚漢域桂州の和尚に語りて曰
唐山にてむかしは平生獨参を服用しけるが虚弱の者
なりしが本邦へ来ては味噌汁を喫(キツ)しけるが為
に獨参にも及ばずて味噌の効(シルシ)を稱揚しけりとぞ

彼土には味噌なし長崎へ来る唐人が日本人に
こひて臭(クサ)しといふなりしまた彼地へ漂流(ヒヤウリウ)せしものの
話りしは味噌を造り商ひて大に富たりといへる話
をも聞しく實(ゲニ)もさることなるべし味も美なれば然もあ
るべけんかし

○黄檗開祖隠元禅師は烟草を悪みて禁じ
其偈にいはく一管狼烟呑復吐。恰如炎口鬼神身。常
年鹿苑有此艸。不説五辛説六辛。此偈語録には漏
たりしが昔彼宗徒に聞しが遺亡せしを又此比
一和尚語られき座禅看経の勤をも怠らせると
悪みたまひしなれど此頃は飲酒は彼僧気(スベ)て
てかる喫することなりしが當時は不喫人は數すくなし

斗しとぐ律とかくして唯其妻乃製のことと
なりまるる事覺もすり時家乃備防の圓機ふな
るもの御さに祖意よりたゞれまるるの霧(キバ)れるたん
○背いたるゝ當時汐見ぐるるにを糊する
人世間よ流るるもの茶と烟艸と此二品の異を
造るるもまと事と易別るるも此あるもなき代
るい行をしけんとまやまを汐しつ背けんぐ
に用るるの用るる人稱たるい鳥帽るるみれも粉を
○烟艸い唐山も此方もたゝ二百文来るるる人
の嗜(タシナ)むものるるるいたれぐるるゆるる
相思艸るもこるる南国よりるるゝ世に伝まれるふ
る本艸備要たゞるるるるもるとして利害と論し

害るるるゝ蓋は新きにるるに書るる始も極老まぐ
嗜むるるにるる害もたるるみれも示はぐるるる例せ
べ加るい食為本艸の類害るるるるに記(シル)すれども
本邦るは中夏の汚るるばるるるるるるるるるる秘
にるるる或は糠に漬るるるい孤(ヒ)吟るるも一人も此害と
知ぐるるるるるる脾胃に到るるい害たるるるるる唐山の
人乃獸肉と常ふ咎るるるるる其害と言ぶるるる本邦の
米は美味よるるる汎(ヒロ)浮とおるゆるるいるふ同し此るる石
石先醒乃る間とるるるるふるれも大きに烟艸をぬまれ
るるるる且仙意乃烟(キセル)管と浮るる書び賜るれし古詩
長篇ありるばるるるるるるる写るる

戲(ニ)謝(スル)洞巖老惠(ヒルラ)金烟管二十韻

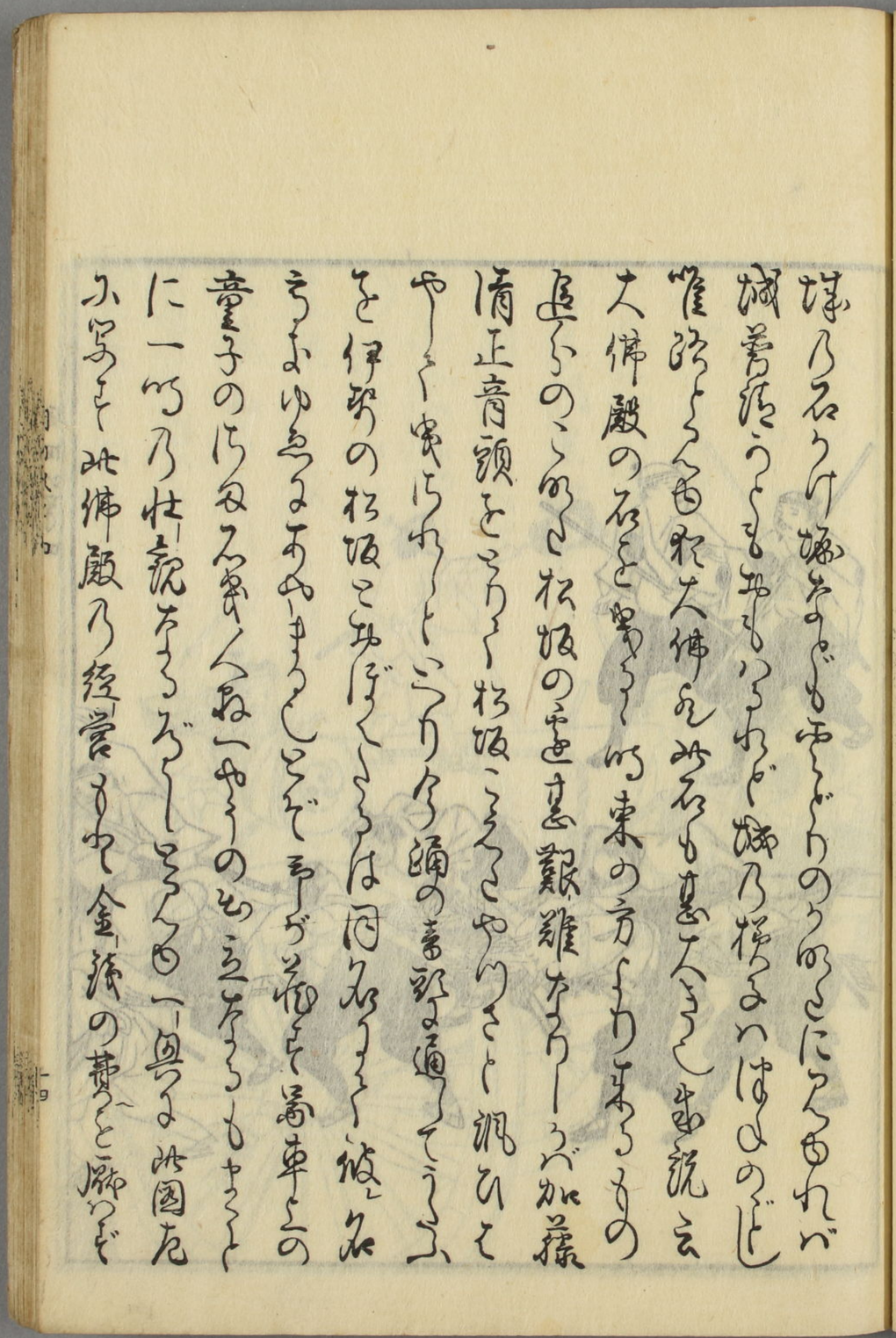
相思千萬里。芳草既為烟。遥謝琅玕贈。何酬錦段鮮。班々双淚竹。艶々並頭蓮。鸞管長且細。螺杯小復圓。彎如象鼻曲。瓢若馬蹄翩。聊比続朝策。何論武子銭。碧筒宜共飲。青箇豈須編。王衍曾揮麈。蘇卿本嚙氈。趣同饕餮境。狂似嗜荼顛。絶勝松柳酔。要将桃李憐。丁香香自結。柳線々猶牽。朱焔龍啣燭。丹炉虎伏鉛。飛灰金琯肉。撃節玉壺邊。流水歌幽雅。薫風和舜絃。惟中非借箸。陌上是遺鈿。不羨餐霞容。還懐服氣仙。吐成玄圃霧。漱作白雲泉。掌摻心良苦。紉蘭佩可捐。微陽田畬谷。尺寳出藍田。因知蓬瀛侶。徒労採薬船。以上私加点

て童蒙に便あり

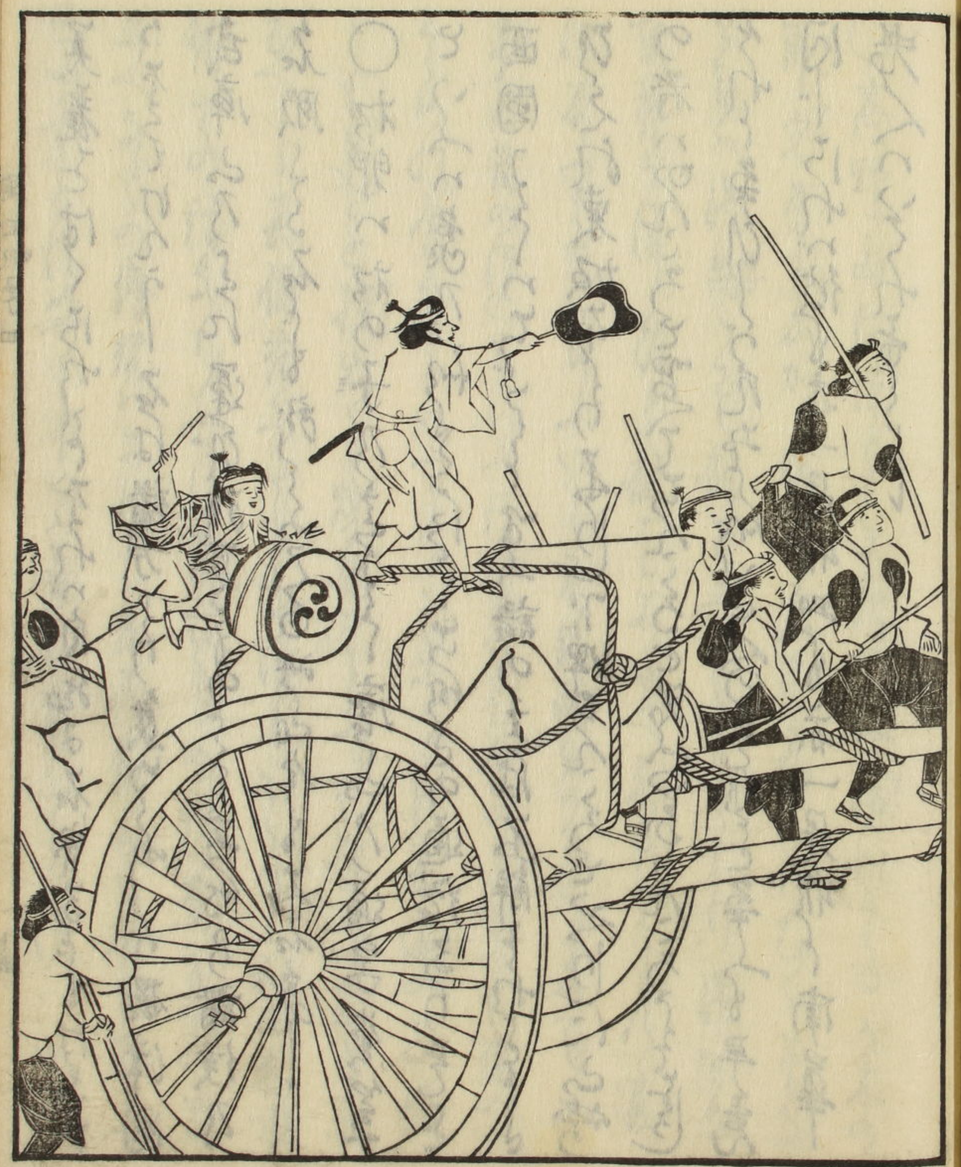
又ある詩に烟草の類を手付てそろをとりて手拈姑娜千年艸。口吐蓬莱五色雲。何人の一聯なりや詠物の詩後なりや三つなれ一冊に付べし

○路の竪横交わりて曲る所へ必真中をわたるべしねらざれど曲る角ごとに人をわけ出するなれあやまちらこともそびゆるもつてりんてんだれわれしこはむかし親族の老人教られしかども幼きゆゑなりしがほとにをふ況ある者の違ふ人の身をとうれさへしとおもひしほどなれ誰れ牛馬又荷などを持たる者に出會てそうせずわたれ死せるも及ぶべし幾乃二三歩をさりて馬卒販夫の

新田いと曲る所を行るこゝろもとなくしぐし
○路を行くにそゞろふたにしりくゝ行い常の禮ゝり
ゝ行れば半馬に乗はきのもれも芸付る方ふ當
まばあやもちまゝ新藤の事てい美い
自日の四ゝ(ミフカヒ)ゝ(キ)日清を人は濃る久はこれは
反ゝ〻ぐ路と濃るの禮ゝ行りゝ〻ぐ〻ゝ久い
づこの国の男女ひ路をゝふぞゝと書ゝ〻ゝ
りやこれいゝとれゝ〻ゝこれたゝゝ
○戸ゝ家ゝ〻ゝ侍ゝる石ゝ〻ゝ車ふ載(ノセ)
ゝ多人数軍国ゝ〻ゝ大佛殿乃石垣乃石ゝ〻
ゝ〻の国ゝ〻ゝ人ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
面乃ゝ代国ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ



城乃石ゝ城ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
城善ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
惟ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ大佛ゝ〻ゝ
大佛殿の石ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
長ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ松坂の毛志雑雑ゝ〻ゝ〻ゝ
清正音頭ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
を伊勢の松坂ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
童子の〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
に一〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ



美麗をはくらべられたるなれば自然よろしきものもけるか
うたるもけんうしろは諸方より集まりしまつの櫻津國
武庫山乃うたに運び殖せるものとて其所乃諸侯乃
名所ゝる石ども所ゝふるゐ山みな大石多し
○杉卵い杉の子乃ゝ唐山乃通字雲笠
といふい象乃杉ゝ杉ゝ杉ゝ杉ゝ杉ゝ杉ゝ杉ゝ杉ゝ
西國ゝゝいちごゝゝゝゝ語のゝは不解ゝゝゝゝ
ひゝゝ東坂ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の者いのんゝゝと習ゝてちんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝ年ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
同じゝゝれゝ彼も亦一是非ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
老人いゝゝれゝゝゝゝゝ

○高野山にはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
節(フシ)穴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○武儒士甚母に仕へて孝を盡すとて行ひすぐれ
母乃意にかなひつゝ世にいとうふかりしかるをてんとうはほ
しれまゝにゆくまねをして床のにらくわをうかびよ
ゆとてうふ物ばかりをたべ来いづこまでかはんん
くらは一日の望うるびくんのごうとこゝろを國とは
じめとくんばふかわりの仕へ乃やうをぬけやしこがの
相撲一巻人も其男の謹慎に仕へ主角ちうふ侯
さるくんうりさるうばよ付て此薄ぬべよとをり
○享和二年十二月の末はて甲斐國都小羽
見村の百姓ちるの長藤人の黄疸に悩
くをと兩親ふく出こゝ代ぬべき兄弟もなるれば
いうもして病を愈しんとまつる幌いみ病乃

良薬をきけばまわるとうたれまれて三十
里程をとおて駿河の原ふるまぐまちふ幸の路ふ
まばちもの街道も往来まれなるにちるべよ武士代
二三人半具しゝうゞ遠先きにてゝまば追付んと急ぎ
原市のぐふりくと彼士人ぬていうる者ぐとこ
農民しとゝうくふつふ農民なるば大路に原をぐう
ば畑をゝば麦を養つべし道の傍なるは草こゝて
秣にゝうん大路ゝ稼をゝよ及ばぬぬやや
ゝゝ和入唯大人に追付きみゝせんとゝうゞて
の仕業しと信無ちゝ背に負ゝる蔦包い行ぐと
ゝつよ去ゝのゝを言ゝて此洪荒ゝやゝ此
行ゝりゃゝでふきゝ水を浮ゝ負ゝるゝとこばちる

病よきみだりみていまだ江戸にゆきたべし
ときはれいんとしてもとばねたもうことも遠くまさ
ものしりはやして四十里をへていうでいせん年せやり
て帰ることを急くいふらべられ江戸に帰らば
速るみくらべしと其人里荘官のなまえ書くそ
きくこはいうかる事方ぞと云ばそれいつよりなぜと
とし沼津駅ふく別ぬ其年い書くあるふ四月
病者い病みすりて十日よ移りぬれば陣屋よ送る
ものを僧と清し腐れ朽ちる折ふ和の髪乃ちく
蔦に包むるの江戸ものをてもと計祝こ甲斐国新
郡小田見村庄屋仁兵衛といつれとも答村こと
所乃官所ちり遣り其使い答村ちり小田んまての

紙をとりて読み其国きてんれば親こ一首の歌あり
可もしるものみくるのみぞ心ぞにぞは病金ぬべ乃ちり仁義
をかをしば親に付くを海をとるこをとりて
国きて感よ故ぞ彼腐の所へ持ち士の志を解ずく
僧ち其支ちり清志をたうとぶりて江戸ものとた
ちふ尋ぬれども志れぬべせんるたきにあるもの此
士奇をとるれらば何ってもを勇ちて是祝
の付よ技をせるこを志よ敬せんとはちるとぞ
国国国郡乃一老僧此ぞうるれき
○備後国深津郡浦と村よ藤井茂兵衛名は謙
字い子虚とこる男は農支志四郎ぞ子初して
ふに孝れ母乃ちふくとるを家を立ふ樵

野ふ草刈とて業とせざりしを童子もすべらを恨
しをしめなりて魁とし無邪の子せしかども真性
剛にして物よ屈せざり業を抜擢なること十七八のち
より漁ッ江頼の清よ文をより獨蒲撰錄乃事ものを
ちしし囊中空しくくれば兼動をうふ人の田園に入
て木柿を拾ひ酒食の料よ充ッるれいんを非
理の事ものをなして果は錢を貪ることなどせざるの
ふいに回々乃業をなるものに恨ありとして責罵り
遂よ縛りて縄をとりけて縛まものをしたがりて錢と
なりてをるいい村人の名をるふ初の木像を造ッ鬻など
よりて公業ども賠償ッ遂よ亡命して四国ふ流ッが
いうのるこの新ッ人の新ッ紙ッ乃浮て讃岐高松乃

儒官久保氏ふ従学ッ性さとして四書を六十
日計ふ手ッ習りぬるを久保氏も為ッうぐよりもし自
ふ敬ッ愛ッ勤ッけるほどに程なく業進ッ名をと
同藩乃富高姫路屋なるものいとを特ッしけるを
四文年のち老母を帰有せふ宮の親進退をべて本
乃人にすぐ者は放逸無頼の徒謹慎篤實の士
と変せりばちきふ村人なを席
を譲り中ッと勤ッ勤ッなんるもの人ッ
ほこるぶるのふなるもいて人ッ
美師友に附べきをるぶ強り蕭識童子れ事を
讃ッ愛ッ詩を解ッ詩を翻ッる詩も示頗ッ能ッ数日乃
後讃岐にかりしづ不幸ッて病よりを地下の俤

文部となりしより後二十六年なり其間人坂本
堂はまふりて国学のとなえ人なれば此行状を漬時
人傳に納んことを乞まつりて既に上本に及れて深
けるゆゑまふ深て周慶三害の類みて幕府も没
まれあるゆゑ此のたびに一時人といつべし
○伊勢云所解とて旅人を竹篭なのたてまつりし
の者先肩を与三郎といふ海といふ海
遠平みて深肩のもの金の色をなを拾へ国きとれど
拾五片あり旅人を送りて後此金驛長に持ゆき
義したるをとおもひたに旅人もきたれどもわく
拾ひしる者なるべしと指揮とて善きたる門さうべ半れ
与三郎にあるべしわれいへ元の所ゆく者す

ゆとと拾へいはは先肩の者拾へは半い後肩のものよ配
ふとて後肩の者拾へとよい先肩よあるとなぬ驛路乃
定ちし先ふゆきふゆ人つけざるはそのまゝあれきちゆ
ゆゑとそ此れいあ三郎此金とともて受べき旅人と
いひて拾へたるべ一百疋と与へよ一金と他へ
といふ善き歟不肯疋といふ長又ちつ
ひとちつば拾片い拾ひしもの元べしみ片いあ三郎
元べしといへども拾ひ驛長もせんとつき
拾へいかるゆゑ此れ人内おの乃文指でし此
金と費とべとい一ばとふたに善ひて言よ得れ
と指でしものも国国のうちにて実行とも遠う
ねど費とて拾へ此ふ此朱ぐり残金ちとなれい

後り年ごとに祝ものごとく脱ぎ領をへ祝へんとせ
ば其領を遠国なれば益の治費よりまさんことを思
に惜むべし唯半分をもつて物の欲とする所より用よ
とこそとつくりしふれもてよこさい年治惜行み
くまうをを驛長のけくこれみくを小家と寄て移
ゝもむ善くを案ついらのての孫のことをまるとを引
はめて信濃乃善光寺へ詣りたく其ゝ所ゝ
小講あるゝ所ゝ屋ゝ屋ゝ脊ゝ肩ゝ色ゝ乃
佛の御歌などへとをやまちて傳へ義せしうば
あるゝ永ゝ所ゝ所ゝ和ゝ付ゝ紙ゝ引ゝ出ゝ紙ゝ
付ゝ袋ゝ肉に金を拾ゝ所ゝ和ゝ出ゝ
前の墨ゝ上ゝ尋ゝ其ゝ其ゝ所ゝ

に義をしてつくのなるゝわるゝ所ゝ
歌ゝくらゝわゝとゝ引ゝうば辞ゝ所ゝ特ゝ
ゝのゝゝうばつのに高家ゝつくゝやゝふ所ゝ彼
ゝ之ゝ歌ゝ田畑ゝ買得ゝ農家ゝ
ゝ初ゝ所ゝ以ゝ兄ゝ弟ゝ
たゝんゝ抱ゝ早ゝ
ゝ方ゝ
ゝ抱ゝ早ゝ
事ゝ彼驛ゝ者ゝ償ゝ
ぬゝ驛ゝ諸ゝ方ゝ
ゝ
て二人ゝ

全くことなることにあらずしかれば思議とこれはなし賊が
その為すところもなかりけるものを海におとし
は隠し置てあるをひきたるにもあらずや
◎ある人のいはく近よりまゐりしに盗賊を捕ふ
ることは役人とするものいのちの力ありて九死なるを
が下吏一人の賊を捕得る時は其家族をよびて汝
は志気あるものなりやなんぢ業をやめよせよと
うちたつことをはかるべし然らば許すべしとて捕(トラ)
へば死刑に行はるべきものもゆるすべしやがて命をたすけ放(ハナ)ちし
後はふたゝび又捕(トラヘ)まへし事なり吏にあはず言
言を用ゆるのみ獄よりはなたれ後ふたゝび罪のあるべからず
せんことを願ひとてやがて刑すべき者の名を名簿(カキツケ)に

書はしめて家族と妻子らを九死にいりて名簿に毛を付し
かさね盗をまちてまたしての刑に行ふ例なるに此その
名にものしるは脱(オチ)ざるなるべし今一人ふたゝび家族を引く
れて下吏まゐりしかれどいかにせんとありけり所の役人
ありしも是たとへ吾過(ワガトガ)に行ふとも彼等を許し給
はれかし陰徳をほどこすにありやべしとて許さる
べきかゝる業をなして後に至る者何の陰徳をほどこす
にのみかれど此はきてかくならばなほ世に伝はりき
病ある者ありける所に相識(シル)者あれは朝鮮人参(テウセンニンジン)を用ゆべ
救(スク)はんといひつるをきゝてに母がいで全く人にすゝめなんと与へ
まゐらせてそれはいふも陰徳なるにあれど今とかく施(ホドコ)しける
ことをなすべしとてよろこびて申すなり再び

思惟しけるこれハやゝ年隔(ヘダテ)たる事なりしが信州に
或国橋のもと一人の男乃神の重なるをみて錐(キリ)にてもつ
これが小石あまた擲(ナゲ)かけけれバ是をしりとかへて見れバ
彼男もかはきて其みる行者どもにいふハみのれハ所謂(イハユル)中
善心切にいふ事のあれバあやしくおもふに是くらゐハさうなりとおもふ
をと神よ入られたりといひける者あるべし聞かれよといへば
そこ人まづうちうなづき傍なりける者ハ今此所へ落て死
んとおもへり其故ハたゞ往里の家なき年貢の
未進(ミシン)にせまりけるがみのれハ黒忍してもおのれが是を
救(スクハ)んと一人の女を遊び女(メ)に売(ウリ)捨六両の金を携(タヅサ)
へて帰る道路がたぐひの者に奪とられ今ハ金を
失ひければ妻子も面をあはすべき所詮の難を

も救(スク)ふべきやうもなけれバ死んと思ひ定めたるよしかたりけれ
をきゝて奪(ウバ)ひたる金ハ十五両ありこれをとらする
まづ是不足(タラ)ざる所の金一両なれバ是ハいかにも志をもて
らん其難をこれにてはのがれよといふにうれしふかころ
げハうれしくおもへども同じく人の事にかゝるか
金ならべくハ我が其上を得て其難を遁(ノガ)れんハ死よ
うしろ唯さんのみにて死ぬべしといふを何ゆゑのう
妻の一人ハ誰にてもなくねバ今又遊女にうらるべき事必
ハ眼の前に金を失ひけるにかはりて我人くれも
憂事なたまひつる懐紙のうちより金を出しとらすに気色(ケシキ)の
弱いうつるをみてしもてやうやく其債へ押しへて走りて行
つもりよろこびて行らんとしけるをとらへとゞめて思ち

人の命をせめうらひにゆも亦命を捨るり
まことにうつくしく業をとうくて者と今くせつとさつさ
まつらば喜びて報ひりしづく四ろりてあり今
一つ尼ふいとと許一たまく尼ふるとりたんるに来り
ふりといく其人ちく眺まうぬとはいばらくめぞくとる
其事ふく行く業と奪んとわどなるよわたくたるこ
ともなく後の法もたりしきあれに語ふくくと
うくんふつうれるべよくなしのれが新言の業をて
二日三日もるふくくく投られんはは必命ばるべし
ふわいとくまひど其時津面にたるうる動きさに法
バ此世をすてあるのじめ尼ばるくとりふげも
身をたつるんばぶふくんいとりしたるどうる

所見ぶり七八里のほどあり行てこれりてくの田
ふどを耕くるゆいと雇人ふ成くるとよ社官ぐうとくとうど
一筆とほんくわるどろにたるひくやられぬりてそ
り道ろくん一里半にたりる紙イ大雨降ありてる
ぶくこのまうけもたるわいどる家ふ立ありて晴間と待
にやうく雲ふみたりわど空晴くわど出りん
とせしにやく老くる家あるくにて此先きに河
を渡ふく水満くわくぶくこうひたるふやど
ア行くくふうわくきくとたちで一夜を明ら出行く
と依ぶくやどりぬるくぶきたるのふくふくだも
てなるわて泊くきを出りてかうめわどくのれ
わどくうとわ来のくとぶりくとうふあるど

糺しけるにまして此娘を一間へ入置あやしと思ひ
たゞしにくわぞおしこめたる石の五輪のふきと云
文ふちるひくわもじうに出づき何ごとやらんはかりや
きて若出其夜いかゞさうつゞみて過しゆくうち手前の
あるさきさらんとする所なるほどくびのちりあれあやしく
んとむかれぐひくてふそいやと尋のしらびうち据ぐくし
其ことふ侍へ今ハ年月もあまりと隔てるしが志やうしのこと
みくしぬすくは金をと貰ひて吾命を助るのくたなき浪人
乃あめ侍くられきてとって侍りしと其人ハ再びあつく
きうれしぬ浪人たれバちぶあさくいま旅に出つるて命
を失ひはんでやまへば此語を其人の本すひさて羽
其身をやつりづきあさりくにちきの禮ど ものづちしとゆるう趣

てもてハそれのくへてお服のかれハそを繕ひをく侍り
不思議に命助りくへ来れりとくその件りとはなくふ
うるれバあるかじもに驚き且喜びて吾志乃通れるを
よ悦れに折くびふ貴しちてある年のかぎりをく此家よ
うも吾もとふおつはきのつけり下くなりて女しくてハ恨ハ
ぶらぬど養あつて此家をと継給ハれとハうけりくりうる
うさたつきありたれバやどうりふ再のくろしく上まりぬるが
やがて此家の子うちつれさりて吏なりけるそくいや上
に来りしとら中吏の君子にして眼識ある者が及び
ぶるのさまり為と情ざる黒心が道理に暗らくし然
皆代に帝になるこそあつて其相かけるもまうし寿過よ
おいげや

○あるものまづしくて母の親乃養ひがたきにつき
盗をして捉へられけるが母ありしよしをのべける
「てらしませ神と君とのめぐみにて親も我身も闇にまよはず
とよみければ此奇官に聞えて死罪を免かれ追放せられし
かやうなるよきこゝろのものもあるべくありき
○粟田口にて刑せらるゝ者馬よりおりて顔をも冬の
さむきの湯気たちて見る人ゝ面にむけて静に白きものを
人ゝあはれともいはでいとく生きをりと猶言し侍ると
死をほゞ覚て帰するがごとしといひつべき侍たりし
と人いへりけり何者なるか何の死をとげせしや定
めて賊たるべきかなれども大膽沈勇におきては惜む
べき者なりしかれども其才の用ひやうあしきなり

犬馬の死よりも劣りけりといふべし
○元禄の比ゟ年季にいたらずして京に中
村某たるものの奢侈によりて官の御咎を蒙り
捉へられて牢へ入られ大津にてやどりける夜逃れ
出て鹿の皮をきて「亡者たゞしいはれもおそろしの
鹿のごとく過奢者の罪をかりて懲よとなり
たれしまゝにその後浪華の巷にかくれゐたりしが其の
聞しくるも「奢りて召捕まゐらせ道行しく
「若人ものかはれてさよ花の旅とい人目を忍ぶ誠
に若人ものまぎれは乃ぞくらぬものを己が非を顧
ざる志なき族とあるは保せずに許さしれ
すべからく此によりて奢かりし此等何のいひ事てものら

言ひたてまつりて薬をせんじ病人の按腹をする間
為隆ふかく高き琴を弾じむ按腹いんと勧めて
なぐさめ慰むこと度々なりぬ蘇合園楽
を聞き始める薬をと蘇合園とこそ故事ありけ
れ遠者のこと止びがたしいとゆゆし
○いまはしきことのはいぶかしく辞世の詩歌いかなれ
ばいかなるいとまもなくいぶかんかの自為のようのれ
たるものをしてつくめてつくめてあれこ
しやうくんありしいとうとくきこえある人の伝
に仁齋先生或寺の古徳の辞世の頌をとこかく
斜にうつす乃象もたしかなるものを書ぶる
ありしとぞいつも同じ意を弾家の例に

て和歌をつくりけるのこと辞世の頌ありし
事ゆゑ和尚もあこと人間朝に頌と書き
日まぐれと記されることを実にたとみはあれど勉強
したるものし但し世勉強の法除のゆゑ成べきわど
酒くの境界ありつべきもしきまさ
しくもぶるきにたる本津の里乃弾院の住僧書
に限死のうんとを乱れしげけて其期
ゆ法衣と改ゆ辞世乃頌をと端座して入寂
を始めた其寺へ後日ゆ住せし僧夏のことく
吸帳乃内にありたるかに人のうげるもそけ
ゆきと大坊をなり後住意をづまりるくうく
たるやこゝば無い先住と臨末乃形相に意浮とて

迷ひとりとなりしかうべこうさ海まうこうして其後い
ろくぶりしとうや其里の尼僧うこうれきとなると
にこりてもつくしのたうさいうるべし平家ときき
いり名聞をもうしろくつくしてこのたうしといつるまま
ときくこたうなべしやを近日法夜律師の鍼(イシ)をとし
い雪上に霜をほうるしと今日忠兵衛子も及ぶふ
抱(カカ)えくしび其中心よりもうるものい頑愚(クング)果賜(ヒセン)の人に
多く聞えてもやうもうれ利の意一点もなしこなば
し智者ふくく頑愚にあらしさいはとふうるきい
それなり
○あるもの其妻の辞世の代作を其師くそのこし
てくれりしいつもいづし辞世を係前をとくいい

そもそれがあるものてて元来の口号わやどてに
そなどのさうのとを地ろれてとするい和許さべし
はいぐたて又無ちうとなしなりれ行げの和奇
師院まる頑愚辞世のるりと結句をなる通
とはえくの業平朝臣の奇をもりしうこれ世
のうり頑ちとこれくらいぐもも和奇師ふてをし
○浪華に浄嶽の一巻僧蒙光をいるは七旬
有余ちくものぐたを学道ゆえはひふ僧徒の不律を
いまむ蠹衣に進んとをくるむうしく蒙衣の出
(ホン)年いくくきものしうく雑ちわるなどいるる
ぐれの事多くにわれぐ凡(ボン)僧ぞも僧(ニク)ていつるもす
りて仏寺蕩(トラカ)し謝謗せんとをくを手をうる行岐廓新

所の前をとうるに、僧侶仏事をとりおこなひ、老和尚
をを清く浄土経をとなへ、希くばおのれまでも勤むべき和尚にて
所へくるるまでは、なほ清き聖なるべき僧の事なり
者性空上人の弟子の進みとて、ひとりの僧ありけり
是ぞ縁を隔てるとて、彼僧どもにいざなはれて
こしらへ仏前にて誦経念仏をぞ行ひ奇を喫せ
られけるが、なほ残りとまりて、なほ残りを
ぬぎすてて、ひとつの物をぬぎ捨てし成べしを
中にて七八歩なる青柳といふ所を老僧つくづく
とうち守られて、眼の色をなほ変じぬ物もせんとぬく
新うちまもりたりけるつぶさにつづけりてなりけるはし
とうちれしぶけうをとりて、賢られしなりとて

さこそとなく一度は無をいたすせふ所青柳い
オあるまの跡をしたうぐちに仏十念をとこふ老僧
うれうたうくぶつぐそうてる顔をうれはしたせよ
とうるまる妙なん得くにちくべと人の作あつぎとえく
まうにんといふのづかてあるまを清て
王にくる事たちつぼの風をえてナぬく作のいとも深く
きと共にとうに入て作るいの事とを生られしうば
妙りてつぐれとをきるを行てこしばをうくと移く
らる無僧をなりく書まーうば妙もてんとれていく
ようこび再れ行いてぎをるなるむあるとぶと
十念をとうけられしうばありいく妙ぐもこそ見に回る
に念仏をとうけるなり無悪の思りしわれい菜の志

あるゆふあかりたまへばここにかゝる信心の氣色
形をはしきいやと申て帰去らんとせしが叔
も帰るべしやと老僧座をたちわかれしより窺僧さる
従ひぬすべわたく手してとはらひすく始ずもに
僧されやうる其十念をさづけて其のつづきしのたまふしか
まりしとて老僧も後の始まりと辞して看御を
かくていま又こそのおほせあそといふとも忘れまじくんま
ざりしにうほも彦もさぞのおそろしうかりんと彼
者本ありて十念をさもしにたゞうつき飯うつく
なかりてやゝなんに復(フリ)せしかどもたゞはやどひのおどり
にん既爽(サハヤ)かなくだりしうば衣服をとて弄(セ)なして去て
あきてし其間よ俗たれ常の意よなりし偖(サテ)かれが

衣服をといてきし拂子をもて十念を授(サツケ)し彼かし才
なくばいへどもおりかて大息せられけるが志賀寺の上人
のうきめも此のひあくされ其僧はそのかはりし信疑とても
老ありやとしんとゆるめてかくしはいつるは哀しむまじ
きものなかの相識る紫巖師四十五年まで持律よ
なりはに大僧に至まる其それあるまる者やゝ年さ
けれどまた食事なりの不自由にありさんとしひさ
まばそれはることあれど今まではわれも若しやせし
てはじまらん女に近よりて戻女も京人と見よかやと
言くはりはまた御見せさまり思りとやと戻たる
過(アヤマチ)も生くるしことより戒律をたもつは隣きとは
よくかたつるしと話せられしは甚とわりしと言くき

○京穂の難ふ不義うちて逐ひ大野某の女東
備前浦に嫁し居たりしが出産のち何ごとなく
住居の表乃空地に隠居をこしらへ元来孤乃
分限なれども貧しかりしゆゑ数も老に及び次
第に困窮なりしが其妻(イサメ)強めたりしもつとめ有りて
不覺(キカズ)にて良雄を付し四十郎士復讐(フクシウ)のこと遂(トケ)
ざりしと孤(カタキウチ)ぶりしも其人数の名を聞くに一旦
有りきし中に大石氏いまだ一旦
ひらきし等り此復讐を催しもやはり結ひ
ふ所なるも人々に其妻(ムスメ)も人数有りきし
義ありしうちに家をあらためつぎきて
有りしかしこれなりしもそこ頭

とかげなること出ずるを常に仏を席を改めて
ものこと貧しきをとろこ有りしかしこれ
ものしるる又国老の長にたるべき国紀を治めて
逐ひはひよ復讐の人数も人に次ぐ義を
きこと言ひつぐことを其方うは罪をたれども
妻(メ)の体なんとよい士の道ふ次ぐ恥べし
ちいは弱をときべしたうはあれど返ぶべき家をたれい
ものこうることもやと思り乗の亭(テイ)にて生活
とみるべし二人の子あれど彼等が養育なんい其
道と妻は再び対面せずして先より石使し婢を添て
ものこに義しかるべうい老婆一人よりほまるふい
てちこ女を迎げて人数を高を使ふ多くて

こゝろざしすなはち義
にしたがひて遠ざかりしかども
ながらへて一生纒(ヤモメ)にて果されしかども
後妻をもとめ彼妻家(ウカ)にて言いうくるもこゝの
ろもせんと障りなくとゞ同志ばやがて来りぬ事も
なく情々遊(サヲ)びくらしぬ此節(ミサホ)操安にかゝるのゝ
きこゝろ成べしと其隣国備後の人坂本才助(ヒロ)乃
筆記に云
○又ある人曰赤穂の故勢大野氏と席争ひしとき
ひとりまことにけなげしほど氏其報(ムクヒ)に法(ノリ)を
同事起りて城を除せらるゝに及びしかば氏ときふ
奉行(ブギヤウ)なる掘(ウツキ)様なる大石氏出て事紛

論り迫来る時に備りそなへし金銀などこれをも
に返辨せられしかば大きふ驚きて此城中ふうやうの
けらるゝひとるくもあるとしてうやと面を改めしとうや
ものれまで大石氏に一向用られざる六七
度もたりなくなどやうの罪と驚りしとなん凡世ふ
人をしるはあるべし用ゐる人なくれば千里の後馬櫪(ウマヤ)に
伏てかなしむと大石氏い雪霜の艱にあるゝ松柏の
節と顯はるる成べし
○良雄在京中の所行い人皆凡けりきとゝる外
みな成(ナリ)者ある人も復讐のこゝろ深しく彼にあ
まりに人は誹謗せるわれ共いかなる事と義(オコ)せ
しとこゝろ知しこゝろ外なるべい敵方ふ知られず

中諸(ソレ)ゝにたちまち作り其業のほうびを感ぜ又
西人いつゝの鹿島志摩の名臣の辭を慕ひ藩校をおこし
稽古(ケイコ)を勤(ツトメ)て武道を奬ぶべし良雄こゝに付き儒学軍学
をもまなびしこゝろいりたちもあるべし

○明智左馬之助坂本の城を築わる時責任の間
に入て長を作りて一日ゝ毎日とせんとこゝろ
深更より深夜に付き居りつゝ眼爽にして馬
寄(ヨセテ)の様子を見んとおもひ傍(ヤウヤク)にのぞみてこの長
を作りとつけり是いまだ舊友たりしかば愛をうけ
てそこに入るゝ入に殿のおもいなりとも
定て一日毎日とせんとおもひ熟べし
奇特のこゝろ思惟(オモヒ)すべしこれも武

を選(エラ)うてとんでもなく度々の功名いまだ
なるべきこゝろあるは身のなる果は今日の作者
も同じ事なべし同じく武を止めて生を安く
子孫を相續せんとなべし此のわるくはこゝる用金
より消んなるべきなるべしとて入れも道理なる
ゝ舊交の親切を謝し其諫に従んとこれをやぶて
皮袋に入れる黄金を傍(ヤウヤク)に置て与へ今日
此城義(ヲ)身死べきなれども吾に知るべ所なり同じ人の
人を同じくこゝろ云ひ知らはこれ高作
に居作し右の金をもつて貧窮(キウ)を救(スクヒ)一生家孫今も上
京するこゝろ中左馬之助の城の日天下の重寶とす
る業業をもつてこゝろの為に傳らべしと

いこりしに彼れ永保元年乙酉(オトゴセ)前とうかいこの名物の
琴を手ずからこの持ちよいて(ジン)ちわしき志のくて
とゆの色ちこ此入れが一件を盛軍記に詳しくこの
こりいちことなれども武士の本意にあらぬこ詳
しりこれもこれもこれども平いかこくこ士のこるるい義
をもて周旋(シウセン)てぐよと共代の風俗きのこい味方ふ
てくこは敵こかる唯功利とのこ眼(メ)にうけてけもせ
と盗こ死もこ死を待で言生の相殘宴するふ
ばりこれとりてこそこれば左馬こみが諫めも入れ
ず従へこも俱に非こすぐこ沢蒼友の恩にこりて
陶朱公に倣(ナラ)いたくこたり
○百年境ゑが記にに戸に蘭亭こここ之オあり

詩とを結ぶこ盲人あり大と戸こ酒瓶を抱き
ゆる中にへりふここ得こりけん鎌倉殿恩をふ什
物をし遺衡にこ千寿の宴に招翁あこ亡と
得こ祇義ゆり大さ常の平四半こ間の年
漆の塗り中に梅華の蒔絵ありこれも不記
髑髏盃をもひ付こ尋常乃あい面白うこび
ここ鎌倉にもり大権二郎の源と称き其髑
髏をここんとこふ息霊雨きりうれど怪しも
懼(オソ)まじ為し帰宅こ酒盃こしたふこの
翌年其月其日ふ及び何の故もなく死せり於保
平人の墓ここ殯(フジン)をうこ浜まつこ居ぐりの勇士乃
墳(フン)とも此盲人詩章の巧みふ傳(ツタ)へてのる非

れをかりて自腹を切りてとゝ
閑田閑にて蘭亭ごとは新しく人多し 或云此前
人又乃他國にあるが如くなるの
指揮のまゝに門人の手にうつくしくかいて
もらひたるよりして用事雑でこゝらふ地こそ
に其返事に悪眼みていたゞきいやりとし
其人ぐ〳〵あぐし其に組織門の者ども筆にたゞち
て放蕩と達とすといふる類多し其中にも此前人が
ごとにいとふ之頼といつるゞし元ふ人の水能ある猫の
基をうべし」
塙雨又閑に云織田信長と越前の清井又子清倉
義景とと討亡し其生首と直とゝ此三人

つゝわに大ふ去ゞとにゝ今ゝまゝ水びの直
なりとて某田勝家とけゞの「其よりもみて酒と
賜ひ所光秀ハ下戸なるゝ外辞して呑ばゝと
ゝて「主と呑しゝらゝに酩酊して迷惑せしもの
なりき斯國の趙襄子智伯ゞ首と漆塗ふ
とゝ又元昊元南が髑髏盞酒飲清風と作ゝし
なゞ和漢閑一類ゝ又浪華の士永田某い端
義に通し酒ハ大ゝ戸なりしゞ祇園の巨盃より
髑髏と金箔みゝ作ゝるゝて八合入ふり酒
長ゝ丸ゝ沃ゝとも呑ゝるふいうゝ
閑ゝ一とゝ閑田云人ゝ清不清のわゝぬ
ゝはゝしみりゝ懶惚の作ゝるゝゝあゝと

かゝる稼ぎ〻まさ側もぐさとして快と宜
うは其身の奢侈にうゝ人なと失ひうゝ慶も
やうわる義剛の世は人書の差別つゝぐなるべしる
に今のさうてかゝる所為と云ふべい行とぞや
○因幡雨云撰津国高槻の先主頃西に物せう
主の山中高樹のうゝ嬰児の泣あり怪しう
さうゝ尺ばかりなる鷲の巣くこは其鷲の掴て来
うたなんと思ふて寄命ぐゝ鉄炮を放うゝ
らわうふ鷲の巣よあうゝ尺ばかりて人を物に登せて
搦しあたらに巣中に赤子と鷲のようもあり打れば
赤子を手を取ひろしてありうとうあるる男子
しうば恵喜びたやうはとうり気とはあて養育

せられしたや長ぐうふ侍れ才発明なるし
まうゝ形てるあるりよう石伴ると前代と鷲津見と号
らわ祿百四十石とうくらわうゝ子孫今ゝありうゝ先
年京前を出る鷲の見七郎左衛門と云ひ一人ゝ子孫
うや和泉守に旭蓮社と云浄土のうれ因祖云
怨とんも鷲るうれと明らわうゝたぐうあるうゝ
ゝうゝ宗四云東大寺良辯と人も同ぐゝ伝記あり
○鷲乃因ふ因因ゝうゝ因ゝうゝあり四又年お
に今しか賀乃ゝうゝにうゝうゝ浪士大ゝに
掴ゝわうゝ空中と物ゝ二ゝ年を経ゝうゝ
ゝゝゝゝゝゝ山中ゝゝ大鳥野人を掴ゝゝうり
ゝ侍ゝゝり此遠ぐうゝ勝刀を抜てはうゝ

きるものと切つりふり捨し片ぎをとりてこれば
ひく〳〵ふる雪濡〳〵ほそふ絡わり辛らしくや
ものとわりて人よあのよに其翼とうて大ふ畏
きうば其る細とうるりるりるこはつこぞと
へば翁根の陽をちくたるりいふ遠るるほどと
後二的中ふまふ乃鄙のけものきとたる
にかぐらうきぬたるこたげ其遠に遠前一寂わと
はるるはるるに出れば其翼みけく其弥はを
国作く其勇壮をるるこびるるぐの諸侯るり遠
しふいづるへう仕くこ出勇せるるやや大るるの人
なるべ空中みるる西氣たるくありめぐきと塔るめく
まで出るやれるい鳥のるたるびくるるるるぐる

此鳥い大鷲たるるべしこれとも茅根の遠るるる折く
人の捕るれしるるあるるいこれぐ所為るるてあるしぐ
此後い此鵜止るるりと其わるりるるい其びるるるん
○塙為云元文三年の比四条坊門油小路の東に
観場(ミセモノ)の儀(シ)を業とする者を奥丹波の何とらく
山里に農人の義ゆ十累年みて應聲虫の病
あるるりとなはるくて観場にいるんやとのるるに
いるる二三の遠前しるるるるいるるも腹中ふ人聲ゆ
るて病人の聲よ鶯ゆるて何のどくいるとるゆ
に国も其支のりの結よ先年霜月に引つれて六條
清(テ)ぜふ薬所るるる体るるる腹中して物とるるる
うば諸人怪るるるるるるるるるるるるるるる

なげくて其夜ごろに帰りてこそ宗田云
金蘭斎（コンノランサイ）といふ老荘者（此傳ハ手ウ時人待ふ出セり）腹中より考えり
遊ぶこと数年なげくこと甚だしくなげくこと
なげもるのこころにて作人きうび哲の問ひて止ることを
待ちかねと馬牧亨安といふ老人の話ひ自のこころ
い乗ることもあることもあるこんうし
○同云江戸の伊丸屋（ウ）の飛脚（キヤク）より丸（ウ）と云ふ
今わが東大きふ遠無一吉川惟足より行ってそこ
ことたの子ふ惟足文庫の事ども及びとて
何やん事なて与くらわるを其屋より建屋うば
子弟よりそこばひ見い「おのづから乃ちと答へ
物う那とう義白ありしそこで又京三條縄手の

伊勢屋と云ふ元結と商ふ者乃家の造化せし
より商者多くなりばト者とたのこと益（セイ）ち
ものふこころ遠木花の紫（ムラサキ）といふ和歌も其花
ものこころ云ひくびうらうべ初待せんやといふ
明年人吾行ってはこれ伊勢屋とは元来この家
びさう木けらもたこうこと云ふ不思議
にこころりことのこと高賣の元結
株まことおらせい面白し婦人此用ふ遠
木花といふこと元来巫祝のこと
ものこと云ふ本と遠ふはこと
建屋ふ本末の和歌ことの安信晴明
の判とこと又物☆かく本に事と用ふこと

始終なりしの咒術ありと云ふ也
○岡田氏に付き又此頃出でしと世に逢未村と
用ふる家は明樹と云ふ
年お或人白山通こゝろざす修行者にて
明樹氏明樹を逢未村の家にて神に尋ねた
志ありて共に出でし
ありし同共若盛夜中ゆゑ人と害に合ふと奪
ひ去り逃げ遠ざ尋ぬれ強暴に虐せられて事は
済しで其を人の怨念敬ぜざる故なるべしと
逢未村より付きまさに去ることなれば
○たしかに三ヶ所の新人寺西をわくるに一老人袴を
はき杖をはきて先へ立ち横伏んでに寛

みて成ありし共人うとみ隨侍の者なりされ
ども年寄の人とはうつ逢もそれぞ物ぎみて
近付き面をとんとうづ沖靈の行述へ入て出
うづくにうづく喰なるべしにて傷ひ敷れ面を
羅しとうの強者なりそれ人のきこゝろに
協法權を所うつくしし強る筆記に觀世大
文字如幕をきりて出しそれを入れに共氣滿
一身の固たくしも遠間なく寄量を出りて
しくそれ者をうけて廣しを物生但馬守敬作
られしとうもも因日の清し改い神を守り
物ることたれそれ者の人に逢ていりて
夢ともなるいたることなりとなると敬人

蹤鞠を弄ぶ人もまた氣と脳の体と固るこ
とを書とくまるも亦行ぶべきの氣より体
体より腕にあるべし表裏ぬるこたれど行
ずく相ず

○六めと人日疫鬼祭祈祷などんと静めんとする
ものらるるこたるべの妄想思慮うるものしこれを
即一ふる乃散乳薬剤の心とべまるふりてしを
手ちるにおりて人日のものらるみちまれに養埃のこう
ゞんめるにらとべしはめるも塵埃ものこたんん
えるおりの光をまちてちるにこうれば
○清海八幡に佃房といふる俳諧師鹿笛をとり
一形凸めを作しあるを造り面に皮をて張り

正傳にて蜜をまりの中指をして此石
をちぶるやうにすれば自ゆふ音をなしたる信樂の
猪師幸四郎ものふ書鹿のまとをつけばまるをまりて
をやうとにて書鹿のまとをつけばまるをまりて
来らぶる鹿形こちわるも若おるぶるくり
来るぶるる鹿乃音をゆうるいはまると信をて
とぶをもしべし其然るまりくそれいまれ
ぶも情をもしべしとをこ沢石石をるぶ乳をの夢と
まるのびく其こるものとあるもいとく猪ぶるぶるべし
○或云々世松蕈を守ととく書くく鉄炮をあ
猪鹿と相ぶしうちる彩りまるまるまる田乃痛を
あるいい遊ぶべいのれるぶ沢ちれい猪鹿田みより

てはあれこそ入てはあれ迷ひもなく食もれ
し松葉にたとへば彼をよ慈しる食たることを今世
所の利と貪るこそわこと嘉くなれ仮初乃
ものも運この利と射るなよ不唯ふすの事ふ
も眼を光らしこ探すもむそ猶鳥獄に及ぶてい
ひ耳に留りぬ
○此筆紀と草たるふ孫乃者このつくこう
ひくくこ貧寺のひに住る猫師狭地嘉ごとも
みくく飛ちもしもくうち見せくづ後そ迫村ひ
家こくへ移こ住ぐ一羽物とれるくひくへ入
ふみもにくく沢宮歌美藁のあるあり所ぐう
おやくくわくも得ひゆくに小倉羽祇こまう沢社

なくぐなみのわも苦よめぐりに彼女況とへ地せ
晩くうとくわぐ眼めくりりくこ弱ものくこ走こ
帰こ此度教せを止め農業とはくむちわぐも浜東
の邪にくりてやにぐ子くく勝不記子い二人を
しも一人い早世しに一人い泊瀬くくあちまに者
なりといり常の見聞よりかいこ離るの多
なくいい行とくなぐるの多くちぐき道行ふり
○謝恩開始衣利代丈丈のまま鬼神い婦女
乃ものくまこて信鬼祇いよまの義とうし
なくこいり孔理学家いるの及ぐ沢かしうみと
こ子孝とのなく沢人い祇仏乃ものと物りて婦女る
のに宮くくくるこくとめぐくしくく沢ものにまちに

予が親とともに二十余年前讃岐金毘羅へ
まうでし時はしの駅馬のかに駒一ツ馬屋乃
あたゆゑぎたりいらにてみゆりしに折ふし請じ
人かたく此辺ふ京の村（所をわすれしが遺志たり）に馬乃離声
みえ来りめぐるとこの奉じ此御社へ祈請し年
ふるに声しめさるなりで馬駒へ来るべしとて撃し
がやうにやすくまれはいよき駒るれば悦む気
そ見て祈祷せし旨此駒ふづうつきてしけるう
こに来かりしたれ気づかきなされがかくれぬとも
いつりまれにめすてけれ旗上騎り此ふ此御社まゐ
他りもいろいろさきらうてゆのあかやまでも皆これ
を思ふ（ハフ）

○此ごろ備後亮の筆紀をみしに熊澤先醒
はじめて藤樹先醒にまみえられし時熊澤氏
皆人乃まみゆる術を術あらしんの鷹よ術でやうぬまて
やいそれしと藤樹みした
門ちとやづる術のやうるいは又かゝわりこゝろぬうらうて
うつろへたまふぐれ藤樹先醒なりまうしきめくし先
は藤樹乃末孫中江久兵衛といふ人のあるよりもぞ
○又このとろは寛政のはじめ清水外（ソト）上の坊
洲の下より東清閑寺にいたる下坂の坂よありのうち
京師の所備行て酒樓となしが近ころ大ふ裏にを
東乃坊をと修理せんとて其の道れ古きを掘穿（チ）し
に石棺のごとくなるもと掘出しけれはさらふそ掘し
ものとゞめ坊乃人てそこを禳りし者と

そぐらふ暴病（ホウビヤウ）とて俄に死せりそれを初
らねども深年盛衰記に新謂怪獣一竹を埋めし
塚此迄なるべきを後世其立所を失ひしゆゑ
其所をうして必其祟（タヽリ）成べしといふ人ありやがて
ものゝごとく土を蓐（オホ）れ猶そのうへに塚をきづき
なげうち小の祖と載せ前乃南方に小塚をありて
なるもそれ一竹なるべし六百餘年を経ぬるほど
の邪祟をなすと懼るべしこれまたゆゑ
きたしくてくるわざなり
私按南殿に鶏乃ものしるしを一名ものよ清水の
を平清盛方御門仮なりしかの作にさるうして元
て近くなるり嚴覚あれど老るる毛朱〻 嵐乃唐名とも

南臺の井とをてゆかに流れ水ちの品〻埋れ
ものり御恨のあい勅使ものり宣命と合〻内毛朱
一井塚といふ則是なり（原本要紀を吳説）
類政乃射〻れる鶏のごとく伝て此清水の
岡乃方なる仮なるこれは三年級の小路乃東嵐堂乃
愛なるなるべ書堂の西門乃〻高昌と号ける
所なるべ土人の説なりと山城名勝志にもこれ同く
名跡志にも清水乃門より西へ出て六波羅ふる
南側人家の西に南西一町余流るゝ清水の岡
なるべいり志るも一井塚は同く盛衰記を引
ものゝ乃なるもの同し此ホト六坊といふ霧
大にうくれり果て一井塚を崇来なるべ

何ともなれば世界いつたいみてんもうこ
とわり
○北野隨念寺といつた寓居する空んといつて
尼僧疾病(ヤマヒ)なるが生涯をもつてわたくしに
尼生涯の身をもつてくれば荒淫と
して稽古をしてくれ獨言をしてくれい
古德の書戒を他の病と所犯する人は蓋
に信義をもつてこれ行もどうに看侍をくべし
病人の稽古に陪するもこの病をわすれたる
ゝ意ゝ憾(カナ)をもつて怨恨(コンカイ)と怨(イカリウラミ)とをもつてべし
とすることを此尼僧はもつてくれることをこのうづ
ゝよ志をもつて手此ごろ病ゝゝ辛と編急

の僧(ソウ)あるゝうゝよ行たゝまべと逆の憂あゝん
ゝと懼ゝゝ男資規世話といひて汎漾
せゝたゝきてみるひとり濡るゝわも着を
るべよゝゝあり
○手性談とゆむの諸りあゝどもあゝべけと
寺話氏きゝ二僧と第ゝゝ野人僧良融法師
に去ル辛酉と邪音妻那猿(サル)ゞ橋(キウ)猿ハ以テ訓ヲ橋ハ以テ音呼ヲ
無馬(ヒヤウフ)とゝゝ毋某月園燈にゝりあゝふ燈に
ゝゝ藁(ワラ)の火すゝはきて身ふゝ乃ゝ苦惱(ナウ)甚し
人ゝはゞひあゝれば去ゝ絶ぶゝうゝけらゝれば急ち
消ゝゞ衣類事如ゝく身も火傷ゝゝ唯指ゝて地
たゝるほどの府あゝゝゝゝ其のゝゝ口ゝのゝゝ

極月廿八日廚より火出でて大内裏の悪風
くゝ廚に焼失せりとの正月廿二日まで某の寺に
あり彼怪異のこと尼たちあつまりて寺に入り給ふ
に廿二日衣類をとれきくんうつりあに宅へ
しづ例の火出でり其家ならび近隣遠焼廿七軒
に及ぶ自ずと放火くゝ入て一日の内に出来る
其後善光寺くゝ焼んとせしかとてとあり
しかとくぶれ焼しし此時氏まぐさふの作り
舞ごりせし其舞篤賞の者なりうぞも女きこれ
てこれとも所客より通ぐる男あり一かしらふ其
ちくれたる男ちわをとりて怨恨まくゝ家はも
うづもいまぐ女の孤切ぐくと幸に前夜彼寝支其

家よりくりしてきて例ゆきくくふ圓爆よ
りわくるものくりぬぎわくよりとりしとりあるが
そくいあくで女又なりしばこれに男と殺せるふ
罪せくわくに集首さるくるとくくるとくくるとくくるふ
客まくと追へくくの名馬いくわふをしくる此報
怨くくくに此怪よあれ家もしなくら成べくしく
くくくで（れ接こぐの題のりにくくたぐくく男と殺せり其怨せくくくに有り怪ぐりの禍爆りくくくる片其くくに成べくくや）
○門人某某話さる奇事烏丸四條衛より近江国某
といふ職人あり千株女同衛後小路同職義某嫁し
さり内のやくるあるて此乃人は憐ひれども義某
美色のあり人ありくくこれとりて離とはあてこれと離縁
をあぬくく怨恨きくくの時ど多くも出ぐ親の家へ

ひろまりてあり名も若葉は人乃ちに彼行方知れ人を
たづねて色〻しらべたるに吉兵ゑが妹和人のもとへ
ゆきかよふまぎれ撰(タツナ)くるる日傘まさ頭よりかぶりて
を母乃隠居へおくりおくれ吉はものくるみさまの
んといへ共家あやしく衣服なども改めず他へ
出行ゐんいうふ中まもてしつきの傘をも持たずに
ものいうふてゐるしるべも喰はずめ〻ゆくりまちわて言
かゞなふ出ちりしうばいつがまたさよくとをとて
とはぎてしのあどもとめ出せやうしづかてこゝもあや
しく〻ゆくへくとやりくもとらふれくこれを日
沈重ちしうば宮へ訟(ウタ)へてあまもく布令(フレ)流しれしらば
其死骸ぶるもこれぞ行ちりの若菜の後

妻あやしふ病を浮ちり服のうちりあるふまあり慈鶯(オウヒイ)
出(チウ)れどしとみてども是い聲に遠ぞうふあてでのふうちり
いつこうくばとび胸せまりて苦しきぞ故に他人をものいふ
同ダもちりうして服の裏乃若菜を取彼りくなふ女の三
年の佛事とせ行若菜ぬりひとで吉兵がかさへ商乃
筋をいひまり後妻が病こ手よ乃ぐりのる此若菜
もまと意四りうぶ行れば離れし蓋れ家へのりもまた
こふてまもこ三年の法事乃ぬる色もあやし吉兵ゑ
て彼あきものうくるくるにこるうるでせ
んうとなく一ものを渡うしりづいうふ後妻い
病よ悩(ナヤ)まりしとく醫薬行稀ものをはくせども
験(ルシ)なしくふそもつる 仔兵ゑ人神道と行人ものり

奇特あり〻きてたて彼病人をのりて八通りの一七箇日
行藤とたゝ病氏治せる人も此神道者よりこれ〻ばり
ろくろに香爐を据へ出て何やらん香と炬火燒とる
まゝあらいりて病人仆まと共燒るよりと霊くば紀
さもわのごとしたてはだし驚くこと〻ばで
此仆はいらづといふくて沙よ驗こるねば神道者の様
ちりそはつるわづかに死せるづ死体全く氣あたりて
腐ることなくたゝ義もの実の物就になりてせんうと
なく樽とうまくこ入れ家も大に裏ゆきわづも義菓
はくみもせばあるなりよというとなりとあん
○鳥獣を教さのあきはちりて人の意を悟すし
めあるいい其業と嬉げ驚くやうの術をなんて

とのひきとさるぬくもあり此よ金佛者ゝ欲涼
しなどいふ人もあり学ぶ者ゝ我の遅きくもあり
道をとゝく和しくをあばむくい天刑といん
○江南乃橋江ゝ根ゝ根ゝ根ゝ根ゝ土地を
ゝつればむさるべよゝ
氣乃ふゝにゝりて氣味を変ぜるゝあり此地
近江伊吹山の蘭を得ゝ象園に根乃朱
毒ゝ尾ばゝゝなれば氣大根と偽稱ゝ此物
信養尿乃力を借ゝ自然生ゝ辛辣地
類ゝ潤味とぬむ人は大に貴就出ゝに
船ゝ他方にゝれば氣味大ふ強ゝ陰物
ゝ本のまゝゝりとゝ水氣に解る故ゝ

ざし人は氣血順流せるかゝに物乃ちぐれみゝあゝ
ゆゝしき氣に癡(カシ)て病ひい狂ひ歌ちれで仮物乃
風寒暑湿ゝ物意と用ひべふゝかりゝ人源ゝ引
ゝ善惡の話(サカヒ)ゝ物ゝ用ゝ惜ゝ物ゝ惜ゝ金
錢ゝゝゝて急ゝ盜心をゝどゝもゝ行ゝべゝ義色
ゝゝて好ふ怨怠を發ゝ仕ゝ物ゝあゝべゝ欲(ホリ)
すゝぐゝゝゝんゝぐれゝば意を迷ゝ行ゝゝゝゝゝゝで親
聽い避(サク)べき道ゝ唯心乃開ゝゝゝゝ行ゝべゝ

閑田次筆卷之四終

閑田爲人學於和漢兼佛儒出於世老也
而其志不在於彼而在于此矣故嘗久遠復古
之旗幟於國風和漢之域焉而欲以明于斯
而傳于後也然其志非徒以文藻也實有去古
世家之意其所著述于編業既大行于世而
時人稱閑田耕筆考証繼作也蓋一時之
隨筆雖多混記而其間偶能有益人之意

而溢于言外亦翁之本色也生涯七十四歲
不能以文藻之餘意耶今茲閑田次筆蓋
翁之全副直指子詩本旨焉余昔官賜時
遊于禪刹之中因與翁相識翁之傍寇宝宗
打破漆桶實為翁之一莫逆余亦易於
國文廣信東望之故也翁業
今年於古稀已過三年矣之過年矣者

為尚遜會也以翁為爭三味之賓余於翁者
如是之契豈有戮而已哉於是乎書數言
以為序焉

文化二年乙丑冬十一月

金子義萬書
于風竹軒

閑田大人著述書目

國文世々跡　三冊

譯文童喻　二冊

勝地吐懷篇　甕頭　契沖先德著　大人注　二冊

近世畸人傳　五冊

同　續篇　三絃溪索先輩編　大人刪補　五冊

閑田耕筆　四冊

同　次筆　四冊

大和物語抄補翼　未刻

閑田文艸　大人文集　附門人文章一人一篇　五冊

增補題字要解　大人閲　嗣直樹主著　小本　一冊

門田早苗　一冊

庭訓抄　大人閲　嗣直樹主著　小本　一冊

歌辭要解　大人閲　嗣直樹主著　近刻

鶏類彙代函記句解

同　續篇　同　近刻

文化三年丙寅仲秋發行

平安書肆

林　伊兵衛
木村吉右衛門
堺屋嘉　七
蓑屋孫兵衛
錢屋惣四郎
文臺屋太兵衛
西村吉兵衛
梅村伊兵衛
野田次兵衛